



檀信徒各位

せ が き
大施餓鬼法要のご案内

聖 名

新型コロナの感染拡大も少し落ち着きを見せ始めました。一時はどうかと心配されましたが、緊急事態宣言も解除され、皆様も少しずつ日常を取り戻し始めておられることと思います。

しかし、これまでの努力が水泡に帰すことがないように、まだしばらくは慎重に行動することが求められています。

本年も下記のとおり大施餓鬼法要を勤めますが、人の密集を避けるため、今回も時間を定めずに奉修致します。

合 掌

記

※期日 7 月 12 日 (日) 午後 ^{えこう}ご回向

※ご回向料 普通回向 1 霊 1,000 円 以上 ご志納下さい。

※お供え料 随意ご志納下さい。

本尊様のお供え、お花代等にさせていただきます。

◎特別 ^{とうばえこう}塔婆回向 今年初施餓鬼を迎える霊位の特別回向を行ないます。
対象となる施主様には別紙を添付いたします。

新型コロナウイルス対策および今回の法要・法話の動画配信について、次ページに案内があります。

新型コロナウイルス対策

◎法要当日は講堂の扉、窓を開放します。墓参の帰り等、ご自由に阿弥陀様を拜んでいただければと思います。

前回同様、感染防止対策にご理解・ご協力をお願い致します。

ご参詣の際はマスクの着用、手指の消毒にご協力ください。

◎受付の右側（ドアのポスト）に**無人受付**を開設します。「人ごみはできるだけ避けたいけれど供養はしたい」という方はご利用下さい。

無人受付開設期間：6 月 29 日～7 月 13 日

◎郵送及び FAX での受付は従来通り行なっておりますので
そちらの方もご利用ください。

今回の法要と法話の様子が 7 月 15 日よりインターネット配信
でご視聴いただけます。

下記の方法いずれかで無量寺のホームページにアクセスして下さい。

久留米 無量寺



で検索、または



今回は神崎市 浄圓寺御住職「藤野良海 師」が、法話の撮影に賛同・協力して下さいます。

このような法要・法話の形は無量寺としても初めての試みですが、どうか皆さんに法要の様子をお伝えできればとの思いで企画しております。何かと不行き届きがあるかと思いますが、お気づきになったことがありましたら教えていただければうれしいです。

私たちにも来る？

お迎え現象

Ⓢ



奥野医師は、2500人あまりの見取りを経験してきた中で、死におののく人がどれほど多くいるのかも見てきました。

例えば、有名大学を出て大手企業に就職した30代の男性。結婚し、妻と小学生の男の子の3人で暮らしていました。

ある日、検査ですい臓がんが発覚し、肝臓にも転移していました。手術はしましたががんは取り切れませんでした。それでも本人は聞き分けが良く、「死は怖いが、自分は子供の頃から強い男でしたから、今回も乗り越えられます」と語っていました。

家族に対して明るく接し、病院のスタッフへの態度も非常にスマート。でも、奥野医師は彼を診ていて、いずれ感

情が爆発するのではと案じていました。

ある日、病室を訪問すると、厳しい顔をした彼がベッドの上で正座をして窓の外を見ていました。固く握られたこぶしがぶるぶると震えていました。「入院中に迷惑行為はいけないと思うのですが、どうしても大声で叫びたい衝動に駆られ、感情が抑えられないんです。他の患者さんにはそんな人はいないのでしょうか。私だけがおかしくなってしまうのでしょうか」

男性は、いつもは見せないイライラした表情で私を見つめます。「叫びたいことがあるなら、一緒に叫びに行きましょう」と私は彼を病院の屋上に誘いました。最初は「あい」「バカ野郎」と二人で大声を出しました。すると今度はひとりで次のように叫んだのです。「死にたくないん

だ」「なんでオレなんだ」「生きたいんだ」

奥野医師は言います。

私は死は受け止められるものでもないし、ましてや受け止めなければならぬものではないと考えています。最期まで「死にたくない」と大暴れしても、泣き叫んでもいいじゃないですか。それはごく自然なことです。格好悪い最期でもなんでもありません。

ところが、その一方で、静かで穏やかな最期を迎えている人もいます。本人だけでなく、看取る側の家族の皆さんが、いずれも安心した様子で死をしっかりと受け止めようとしている。そうした人たちに共通する体験のひとつが「お迎え現象」です。

死は、一般的には「得体の知れないもの」です。未知の領域の死は、人にとって「得体の知れない恐怖」になります。ところが、看取りを

通して数々の「お迎え現象」を目の当たりにしてきて気付いたのは、そうした死の恐怖を乗り越えるのに、「お迎え」が何らかの助けになり得るのではないかということでした。

お迎えに訪れる死者たちは必ずしも恐怖の対象ではありません。出現のしかたや会話も自然で、恐怖や不安も感じないように見える場合には、その人のもとに一緒に行きたいという希求と一種の安堵感のようなものが本人には生まれているのかもしれない。だとすれば、病気になる、最期が近づいてからではなく、まだ元気で健康な時に「お迎え現象」を知っておくことが大切だと感じています。

家族が「お迎え現象」を知っていると「誰かお迎えに来たのかね」「笑っているわよ、きつと亡くなったお母さんが来たんじゃないの」という会話が自然と交わされています。

つづく

玉田 行俊の 道場こぼれ話 3

第六回



こんにちは、玉田 行俊です。今回の道場は東京ということもあり、指導員の雰囲気は今までの修行をした京都と違っていました。

◎東京と京都

基本的な指導は京都も東京も変わりませんが印象として…

京都

指導であまり細かいことを言われず大雑把で気楽。その分、道場生を放置する（自主性を重んじる？）傾向。道場生の体調不良に気付いていても、本人が申告するまでは気付かないフリ。衣の着崩れや食事等における日常の作法にはかなり厳しい。

本尊や本堂は歴史ある煤けた感じが尊ばれるようです。そして汚めの関西弁で怒鳴られます。

東京

指導はきめ細かく、手製の虎の巻を配布してくれる等かなり親切。しかし、虎の巻をちゃんと見ずに間違えた場合、指導員は烈火のごとく怒ります。道場生の生活の細部まで指導員の眼が光り、体調等も細かく管理される傾向。

本尊や本堂は歴史ある煤けた感じよりも、豪華絢爛な感じが尊ばれるようです（東京大空襲でほとんど焼けてしまった影響もあると思います）。そして増上寺では当然 標準語で怒鳴られます。まあ、いずれにしても結局怒鳴られることには変わらないのですがね…。

どちらが修行し易いかは好みの分かれるところですが、京都出身の私としては、やはり京都の指導がなじみ易く、東京の指導は少し窮屈に感じました。それに僧侶は質素を旨とするハズなのに、あんまり金ピカで煌びやかな本尊様や本堂にも少し疑問があったのです。

◎出張法要

近年、過疎地域においては運営の厳しいお寺が増えています。檀信徒との結びつきが残っていない限り、寺院は供養・信仰の場を継続する責務を負うため、一人の住職が何ヶ寺も掛け持ちしたり、住職が外に働きに出て、自腹を切ってお寺を存続する等、何とか持ち堪えている状況もあります。最悪、廃寺となるなど各宗派で問題となっています。

その中でもとりわけ島根県は人口減少が著しく、平成二十二年には全国で初めて大正時代の人口を下回ったそうです。若年世代が首都圏へ流出し、同時に年老いた両親を首都圏に呼び寄せることで過疎に拍車がかかっているようです。

そこで島根県西部・石見地方の浄土宗寺院有志が、平成十九年から毎年、東京の増上寺で「石見教区東京法要（通称出張法要）」を行なっています。石見地方出身で東京在住のお檀家さんのために、石見のお寺の住職が増上寺に出張・集結し、大規模な合同法要を行うのです。

達はそれぞれが煌びやかな金欄のお袈裟を身に着け、美しい音声が大殿の中に反響し、荘厳な飾りの中、光り輝く阿弥陀様が鎮座。増上寺の照明などの効果も相まって、理屈抜きで身震いしました。

＊東京はええカッコしい＊

という少しマイナスなイメージがあったのですが（東京にお住まいの方、スママセン）、「ええカッコしい（豪華絢爛な感じ）」も悪くない、むしろ良い場合もあるんだなあ…」と眼から鱗が落ちました。

浄土宗寺院の本堂は「極楽浄土の様相の再現」を目指したものです。そしてこの出張法要では実際、極楽浄土の片鱗を垣間見た気がしました。道場の予定の都合上、十分ほどしか見学できなかつたことが残念です。皆さんも機会があれば、是非一度は増上寺の大規模法要にお参り頂くことをお勧めします。圧倒されますよ。

今回の道場開催中にこの出張法要を見学する機会があったのですが、かなり見応えのある法要で驚きました。各お寺の住職

※通常は月に一回以上は大規模法要がありますが、コロナ禍により当面は一般公開できないようです。是非見て頂きたかったので残念です…。